

戦争・差別と宗教 なお問う

神に祈って戦争や差別はなくなるのか。指導者が責任を投げ出した時、人々はどうすればいいのか。米国の指揮者で作曲家、ピアニストのレナード・バーンスタイン(1918〜90)が舞台作品「ミサ」(71年初演)で突きつけた問いは、半世紀近く経ても未解決のままだ。

バーンスタインの舞台作品「ミサ」

バーンスタイン作曲の「ミサ」は2時間の舞台作品で、オーケストラ、合唱団と独唱者、バレエダンサー、ロックバンドも出演する。初演は71年9月8日の米ワシントン。暗殺されたケネディ元米大統領を顕彰して建てられたケネディ・センターのこけら落とし公演は物議を醸した。カトリックへの信仰があつかった故大統領をしのび、ジャクリーヌ夫人が作曲を委嘱したにもかかわらず、夫人は初演に姿を見せなかった。ウイーン国立歌劇場での公演予定も中止された。

「崩壊」する司祭

「ミサ」はギターリストが法衣を着せられ、司祭にまつりあげられる場面から始まる。ミサの儀式を行おうとすると、街の人

46年前の初演 物議醸す

々が集まり「なぜ神は戦争を止めないのか?」などと疑問を浴びせかける。ひたすら「祈りましょう」と応じる司祭だが、重圧から法衣を脱ぎ捨て、ミサで用いる聖器を割り、やがて精神的に崩壊してしまふ。残された人々は……という展開だ。

神聖な衣や器を粗末に扱う場面に、カトリック界は「冒瀆」と反発した。バーンスタインは覚悟の上だった。

70年前後の米国をふりかえると、ベトナム戦争は泥沼化し反戦運動が相次いだ。黒人差別に反対したキング牧師暗殺(68年)で人種差別をめぐる対立も激しさを増した。

倒錯した司祭に聖器を割らせ、キリストの血の象徴である葡萄酒を「赤くない。汚い茶色」と独白させて、バーンスタ

インは国内外で血にまみれた米國を告発した。錯乱の末にミサを投げ出した司祭の姿は、米大統領が辞任に追い込まれたウォーターゲート事件(72〜74年)を予感させる。

エレキギターも

ウッドストックでの野外ロックコンサート(69年)に象徴された若者文化も、バーンスタインは無視できなくなった。「ミサ」にエレキギターを導入し、サイモン&ガーファングルのポール・サイモン提供の歌詞を使っていることから明らかだ。

混乱は信仰の世界にも広がっていた。60年代には宗教的権威が弱まり急進的な神学が台頭。「人種差別を容認している米国社会の神は死んでいる」と主張する神学者も現れた。「変革の時代にバーンスタインはミサという伝統的ジャンルをわざわざ選び、打ち破ろうとしたのではないか」と関西学院大神学部の土井健司教授は指摘する。

自身の苦悩重ね

バーンスタインが問うた戦争や暴力と宗教のかかわり、差別や貧困、政治的混乱は今も解決されない社会の苦悩である。「さらに自身の苦悩を重ね合わせた」と指揮者の井上道義さんは言う。「ミサ」についてバーンスタイン自ら「私のすべてであり、私の人生」と語ったからだ。ピアニストで「ウエスト・サイド物語」の作曲者にもかかわらず、バーンスタインは指揮の巨匠として演奏会を続けるよう求められた。その姿は「法衣を

7月に公演する「ミサ」の舞台模型を示し、演出の意図を話す井上道義さん



着せられミサの主宰を迫られたギターリストそのもの」と井上さんはみる。

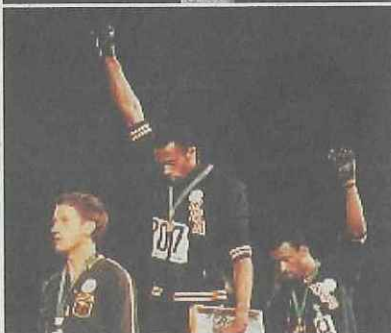
「僕も作曲をするからよくわかる。作曲とは大きな鏡に自分の全身を映し出すような作業。「ミサ」を作曲し、バーンスタインは改めて自己を見つめ直したと思う」

井上さんは7月、「ミサ」を日本で23年ぶりに本格上演。関西では初演となる。司祭をバーンスタインとして描く構想を練っている。(森本俊司)

最後の来日で指揮をするバーンスタインは1990年6月29日、札幌市、林喜代種さん撮影



1968年のメキシコ五輪の陸上競技・男子2000メートルの表彰台で人種差別に抗議して黒手袋の拳を上げた米国人選手。2人は米国チームから資格停止処分を受けた



23年ぶり日本で来月上演

■バーンスタイン「ミサ」(新制作・日本語字幕付き)は7月14日午後7時、15日午後2時、大阪・中之島のフェスティバルホールで開演。井上道義さんの総監督・指揮・演出、大阪フィルハーモニー交響楽団ほか出演。1万5千円〜7千円。学生席は千円。問い合わせはフェスティバルホール(06・6231・2221)。